

主題	穏やかに過ごして頂く為の排泄援助に向けての取り組み		
副題	自立した排泄を行いたいという気持ちを汲み取るケア		
排泄援助		こころのケア	
研究期間	8ヶ月	事業所	特別養護老人ホーム・偕楽園ホーム
発表者：菰田 大和		アドバイザー：	
共同研究者：足立 晴香、福重 智美			
電 話	042-691-2830	メール	home@kairakuen2830.sakura.ne.jp
FAX	042-691-8288	URL	http://www.kairakuen2830.sakura.ne.jp

今回発表の事業所やサービスの紹介	昭和55年以来縁に囲まれた八王子で「福祉の心」を育んできました。特別養護老人ホームでは定員100名で、空床型でショートステイも設けています。昨年4月より併設で「デイサービスセンター初音の杜」「グループホーム初音の杜」を開設し、地域に根づくことを目指しています。
------------------	--

《1. 研究前の状況と課題》

◇自身でトイレに行きたいと意欲があり、排泄動作も自ら行うも失敗してしまう方に、意欲を損なわないようにしながら排泄に取り組んで頂けるようにするにはどうしたらよいか。

排泄を失敗してしまうことで、落ち込んでしまい、それによって生活に支障をきたしてしまう方への精神的な援助とは何か。

◇研究対象者Oさん状況に関して
移動は歩行器を使用される。排泄動作は自身で行えるが、間に合わないことが多い。自分が失禁してしまった、排泄動作を失敗してしまったという事に落ち込まれてしまい、ひとと話す事が大好きな方であるが、居室から出て来なくなり、食事も食べたくないと拒否されてしまう傾向が見られた。

《2. 研究の目標と期待する成果・目的》

◇研究対象者に対しての目標

- ・継続して自分でトイレに行きたいという意思があり自身で排泄動作を行えるようにする。
- ・清潔を保持できるようにする。
- ・朝、気持ち良く目覚めてもらえるようにする。
- ・汚染した紙パンツも自身で筆筒に隠されてしまうことがあるため羞恥心に配慮をする。

◇排泄援助全般とした目標

- ・O氏への排泄援助に対しての認識と、対応の統一化と徹底。
- ・個々に適した排泄援助を行うためにアセスメントは重点的に行うことにした。

《3. 具体的な取り組みの内容》

◇時系列で記入可能な書式を作成し、排尿、排便のタイミング及び失禁のタイミングや昼夜の生活リズムを観察する。

◇夜間のトイレ誘導の時間はこれまで夜間のトイレ誘導の時間として設定していた0時と4時として、1週間の統計を取る。

◇居室巡回時やポータブル回収時に、本人に失禁や衣類を汚してしまったことに関しては触れずに、汚れた衣類やオムツがあったら遠慮なく職員に声をかけてくださいと伝えた。

《4. 取り組みの結果と考察》

◇夜間（18:30-6:00）自身でPT使用した日が7日間にうち6日。

→夜間尿意を感じ、トイレに行こうとしていることが分かった。

◇0時、4時に毎回オムツに排尿が確認されている。

→尿意は感じて起きているが、トイレに間に合っていない。0時のみ、もしくは4時のみの声掛けでは尿汚染されてしまうことがあり、尿量も多いことから、声掛けの時間を早い時間に設定し、夜間は2回は声掛けしトイレに誘導する必要があった。

◇以前は汚染された衣類やオムツを居室内に隠してしまわれていることがあったが、昼夜問わず、汚染された衣類やオムツの捨て方を職員に相談しにくるようになった。

→居室に汚物や汚染された衣類の回収ボックスを設置することで、羞恥心の配慮が出来るのではないか。

《5. まとめ、結論》

◇O氏の取り組みから

- ・以前より失禁が見られており尿意は見られないようだったが、研究を通して、尿意を感じることがあるが、結果としてトイレに間に合っていなかったということが分かった。

- ・恥ずかしさのためか、隠してしまいがちだった汚染された衣類やオムツは、声かけを行っていく中で本人から職員へ歩み寄ってくださるようになった。

- ・尿量と排泄される時間は0時から明け方に集中している。睡眠時間の確保はもちろん大切であるが、翌朝、目覚めて食事を摂って頂くには0時、4時両方の声掛けが必要であった。

◇排泄援助

- ・これまでは安眠に配慮した援助として定時の声掛けを実施してきたが、今回のケアでは、利用者の羞恥心への配慮を重視した。その結果、声掛けや、ベッド周りの環境作りが不足していたことが分かった。

◇排泄援助が利用者の生活にどの程度影響を及ぼすのか、また、適した排泄援助を行っていけることで、取り組み意欲を高められることも分かった。

尚、今回の研究発表に関しては、本人とご家族に了承を得て、掲載させて頂きました。

《8. 提案と発信》

日々の生活のなかで、起こるわずかな変化を見逃さないように留意し、ケアを実施。定期的な援助の見直しが必要である。利用者の方々の羞恥心や意欲に配慮した取り組みをしていきたい。

【メモ欄】